て終はなくてはならないのに、生に對する愛着がなぜに斯くも一切對一切爭鬪の相を現出しながら生に執着しつゝあるのか、たれしも誘はれなくてはならない死の魔暗黯の深淵如何にせばとて斷滅の運命の不可抗力に支配されるのだ、だからと云ふて一部の人々のやうに享樂主義刹邦主義に本能の衝動に任かせて生きて行くのが本當だらうか、生きて行く以上自身を生かすことが大切だ自分さへ生きれば人なんか少しもかまふことがない强く行け……多殺一生して直進すべきであると云ふ已愛主義が社會進化の眞理であらうか、否それはあまりに怖ろしい惡魔の生き方である、人生の旅程は靈魂に求めて行く純なものでなくてはならない。

たれしも觀られない死の所有者である以上死の運命は否定し得られない事實である、過去の悔恨現在の努力未來の希望其の理論を語るよりも、現在の生の事實に刹那々々の生に如何に淸く美はしく輝かしく生くべきであるか、充實した靈魂の抱持者そのものではあるまいか、眞暗であつた過去と光明であるべき未來は現在といふ苦惱の經驗世界の連續に外ならぬものとすれば、三世貫通の人生はあまりに悲慘である何處にか歡喜の涙に滿でる淨化の樂園があるべきである。

暗黑と爭鬪から去つて無爲の濁衣を脫して眞實の生命の奧堂に達した人こそ聖者である、人類の美しい犧性者開拓者となつて煩惱の世界を一掃した聖者の道こそ我々の生く可き道である、人間の本然の姿は光りの體でなくてはならない光明に接する時に照されるのではなくて、光明それ自身でなくてはならない、と聖日蓮は敎へてくれた。「日蓮は泣かねども涙ひまなし」……「一切衆生の異の苦を受くるは日蓮一人の苦なり」……

斯ふした溫い聖者の慈悲に浴しつゝある私はどうかして光りの體になり得ない、此の感激の涙もて自身に深く努力するのが歩むべき道であると思ふ。

聖訓

正像二千年の大王よりも、後世を思はん人々は、末法の今の民にてこそあるべけれ。（撰時鈔）

國は法に依つて昌へ法は人に因つて而して貴し。（立正安國論）